

平成30年(第12回)みどりの学術賞選考委員会  
委員長コメント

平成30年(第12回)みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者約400名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼しました。

その結果、約30名の候補者の推薦が得られ、多様かつ大変幅広い研究分野から、受賞に相応しい研究者のお名前を挙げていただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、景観計画の分野と植物分子生理学の分野で活躍されているお二人の方が受賞に相応しいとの結論にいたしました。

受賞者のお一方は、景観計画の分野で、自然環境の保全に関する環境影響評価において、映像機器等を用いた景観の予測技術を開発し、景観や触れ合いの場としての自然環境への影響を予測・評価する手法を確立するとともに、国立・国定公園の再評価などにも関わり、わが国の自然環境保全の推進に大きく貢献された、東京大学名誉教授の熊谷洋一博士です。

もうお一方は、植物分子生理学の分野で、植物の乾燥や低温などの環境ストレスの耐性に関わる多くの遺伝子の発見により環境ストレス耐性の仕組みの全貌を明らかにするとともに、鍵となるマスター遺伝子を活用した環境ストレスに強い品種の開発を進め、将来にわたる食料の安定生産や、地球環境の保全に向けて大きく貢献された、東京大学大学院教授の篠崎和子博士です。

受賞者お二人の研究の分野は大きく異なりますが、学術的な観点から極めて優れた業績であるとともに、いずれも人類と「みどり」との関わりについて深く追求され、「みどり」を活かして暮らしていく未来を示された研究として高く評価いたしました。

選考委員会を代表し、両博士の永年に渡るご研鑽に対し、心から敬意を表するとともに、「みどり」に関する学術が新たな知をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待し、念願するものであります。

平成30年3月9日

みどりの学術賞選考委員会委員長  
石川 幹子